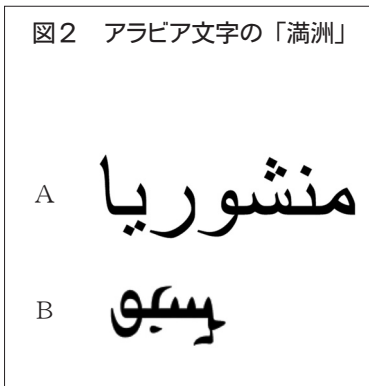
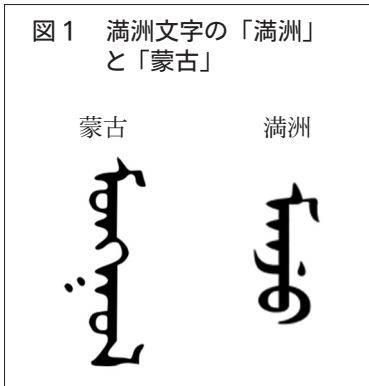


調べてみました

満洲とアラビア… 縦書きのアラビア文字

牛木久雄（会員）



国際善隣協会と縁が深い満洲地域（旧満洲と内蒙古）では、歴史上独自の文字を国語に用いていた。満洲文字は清朝の初代皇帝ヌルハチが1599年に蒙古文字をもとにして作らせた。多くの会員はお分かりだと思いが、蒙古文字は縦書きで、各文字を繋げて書く草書体の字形となっている（図1）。

筆者は、この文字群の独特の書体が以前から気になっていたので、その起源を調べてみることにした。その結果、インターネットの検索等によって遠くアラビア発生の文字に繋がる背景がわかった。

まず、満洲文字の起源である蒙古文字であるが、13世紀にウイグル文字から派生したのとこの文字というのは、中国新疆ウイ

グル自治区で現在使用されている横書きのアラビア文字ではなく、8世紀にソグド文字から作られたといわれ、ソグド文字は、さらに古くアラム文字から発達したということである。アラム語は、海洋民族フェニキア人の言葉として有名であるが、アラム文字は現在イスラエルでヘブライ文字として使用されている。ソグド語では、縦書きも、横書きもあったといわれるが、ウイグル文字としては、横書き草書体を取り入れ、これを縦書きとして確立したとされる。

モンゴル元朝では、1269年、チベット僧パспаによるパспа文字を国字としたが、元朝の終焉によって、パспа文字は現在のモンゴル文字に席を譲った。しかし、モンゴル国では、1941年以来ロシア文字（キリル文字）が、国字として採用されている。ソビエト体制崩壊後、再度蒙古文字を国字とすることにしたが、普及は思わしくない。中国の内モンゴル自治

区では現在も蒙古文字が使われている。一方、満洲文字は、すでに遺産化したに等しい。

蒙古文字と満洲文字が起源とするウイグル文字は、横書きのソグド文字を単に縦書きに並べたものではなく、いわば横書きで書き上げた文書を、左回りに90度回転させた具合になっている。現代アラビア語も含め、アラビア起源のソグド文字やアラム文字は、右から左に1行ずつ書かれ、筆書きでは下から上に払うことが多い。この書法が左に90度回転すると、筆は右から左に払われ、各行は左から右に並ぶことになる。満洲文字も蒙古文字も、筆を右から左に払いながら、1行を上から下に書き進め、各行を左から右に並べるから、左90度回転の理屈通りに書かれている。

図2には、「満洲」を現代アラビア文字（A）と横書きに戻した満洲文字（B）で示した。このようにして並べて見ると、お互いの近さがよくわかる。